



きみを思う空

リリィー

二十段はある階段を駆け上り、腰まで伸びた雑草をかき分けて、進むとそこには一

午前七時になったと同時に目覚まし時計が鳴り響いた。

あたしは布団からゆっくりと手を伸ばし、鳴り続ける目覚まし時計を止める。カーテンの隙間からは光が差し込み目を細めた。

目覚ましを止めてから少しして、布団からゆっくりと出た。寒い部屋の中、あたしは着替え始める。ブラウスを着て、スカートをはき、チャックが布に引っかからないようにゆっくり上げ、ブレザーを袖に通す。六年間も着た愛着のあるこの制服も、あと一ヶ月もしたら着ることがなくなる。

あたしはブレザーのボタンを留めると、二段ベッドの階段を上り大きく息を吸った。

「零生（れお）！起きて、朝だよ！」

布団から首だけを出して、気持ちよさそうに寝ている一人の少年。大きい声を出して起こしても、びくともしない。

あたしは布団を掴み、ばさっと布団を剥ぎ取る。

「寒っ・・・」

少年は、ぶるっと一度身震いをし、また縮こまる。

「零生！起きて！」

もう一度声を上げると、少年はうっすらと目をひらいて眠たそうに問う。

「もう朝？」

少年は目を擦りながら起き上がる。

「うん、朝！早くしないと遅刻だよ」

階段をゆっくり下りながら答えた。その後を少年が眠たそうな表情をして下りていく。

ここはごく普通の街。都会と言ったらそうでもないけど、田舎と言っても、別にそうでもない。ほんとに、極々普通の街に、生まれた時からずっとここに住んでいる。何年後かしたら、思い出のある街と言ったらここなんだろうと思う。そして、あたしもごく普通の小学生、桜 零衣（さくら れい）。特別頭も良くないし、スポーツだって人並み。どっちかと言ったら音痴なほう

なんだろうけど。

「零生、着替えた？」

クローゼットの前で眠たそうに着替えている少年。彼は桜 零生。あたしとはまったく真逆な彼。頭も良くて、スポーツ万能。なんでも簡単にこなしていて将来有望な彼。いつも周りからは期待をされている。

そんな彼、零生とあたしは双子の姉弟。やっぱり周りからは零生と比べられていた。「双子なのに」とか「どうしてこんなに差がついたんだろう」とか。でもあたしは、零生のことを僻んだりはしていない。みんなに優しい零生が好きだから。もしかしたらあたし自信も、零生の才能に誇らしく思っているからなのかもしれない。

「おはよう！」

一階に下りると、お母さんが台所に立っていた。

あたしは元気よく挨拶をした。お母さんは少し後ろを向いて、「おはよう」と微笑む。

「準備できてるから早くたべなさい。遅刻するわよ」

あたしは、目玉焼きとトーストが置いてある机の前に座った。零生もあたしの隣に座った。

毎日たわい無い会話をしながら、朝食を食べるいつもと変わらない日常。

「今日だったよね？春花姉の引越し」

「春花？うん、今日の昼に引越しよ」

春花姉とは、私たち双子のお姉ちゃん、長女の桜 春花。今年の春から大学生で、大学から近いアパートに引っ越すことになった。

「じゃあ、お別れの挨拶とかなないと」

あたしはトーストにかぶりつき、もごもごとしながら言った。

「そういえば、俺たちも後一ヶ月したら卒業だよ」

零生は突然話題を変えた。

「だよね。まだ実感ないよ」

零生の方を見て、笑って言った。

「俺たちが中学生だよ。想像もつかないよ」

「でも楽しみだよね」

あたしは、ニコッと笑う。零生は陽気だな言いたそうな顔をした。

零生とあたしはご飯を食べる手が止まっていた。

「楽しそうに会話をしているけど、遅刻するわよ」

あたしたちはお母さんに注意されて、同時に時計を見た。もう、時刻は八時を指していた。

残っていたトーストを頬張り、牛乳が入ってるコップを手に取り、トーストを流し込んだ。そして零生と同時に立ち上がる。

「行ってきます！」

あたしと零生は急いで部屋から出て、靴を履く。その時、後ろから女の人の声がした。

「行ってらっしゃい、お二人さん」

後ろを振り向くと、まだ起きたばかりの春花姉が立っていた。

「あっ、今日引越しなんですよ？今度遊びに行くね」

あたしは立ち上がって、笑顔で言う。

「うん、いつでもおいで」

春花姉はそう言うと、手をひらひらさせた。あたしは「いってきます」と言って、玄関のドアを開けた。

「零生もいってらっしゃい」

零生に向かって笑顔で手を振る。零生はちょっと照れくさそうに頬を赤らめて「いってきます」と言って、あたしたちは家を出た。

いつもと変わらない朝だった・・・

二十段はある階段を駆け上り、草むらをかぎ分けて進むとそこには、大きな木が一本立っていた。丘の上の真ん中に。

辺りには特に何も無かった。雑草が生えていて、花が咲いているだけ。だけど、そこからは街全体が見渡せた。あたしたちが住んでいる家、よくお母さんと行くお店。そして、零生とよく一緒に遊ぶ公園。とにかくいろんな物が見えた。

「今日からここが僕たちの秘密基地だ！」

零生が大きく両手を広げて言った。誰にも言ったらいけないあたしたちだけの秘密基地。

「ここは、僕たち二人だけの世界だよ」

「二人だけの？」

「うん。僕たち二人だけ！お母さんにもお父さんにも内緒だよ」

零生はニコッと楽しそうに笑って言った。あたしも「うん」って笑顔で返した。

とても嬉しかった...

でも、今はもう、どうして嬉しかったのか覚えていない。遠い昔の話だから・・・。
あたしと零生が小学校に上がったばかりの頃の思い出。

太陽が西側の山に沈みかかった夕暮れの教室であたしは、窓からグラウンドを眺めていた。グラウンドでは、三年生から六年生の何人かの男子生徒でサッカーをしていた。もちろん零生も参加している。

「ほんと仲がいいよね、零衣ちゃんと零生くん。今日も一緒に帰るんでしょ？」

一緒に教室に残っていた友達の雛（ひな）が羨ましそうに窓の外を眺める。

「うん。いつも一緒だよ」

あたしは自信満々に言う。

「私もお兄ちゃんがいるんだけど、全然話もしないよー・・・」

笑って言っているけれど、どこか寂しそうな表情だった。あたしはどう返せばいいのかわからず、言葉が出なかった。

刹那。

「零衣ー。終わったよ」

突然教室のドアが開き、零生の声が響く。

あたしは立ち上がり、急いでランドセルを背負った。

「じゃあ、先に帰るねー」

まだ残っている雛に何も言えず、笑顔で挨拶をして教室を出た。

帰り道。零生と並んで家へ帰った。まだ五時だというのに、もう空は暗くなっている。

「今日はどうだったの？また零生がいるチームが勝ったとか？」

あたしはちょっと、冗談で言った。毎回零生がいるチームが勝つわけがないと、あたしは零生を疑っていたからだ。

でもやっぱり、零生は本物の天才だった。

「当たり前だろ！俺がいるチームが勝つに決まってるだろ」

零生は笑って自信に満ちた表情で言った。あたしは天狗になってる零生に笑って返す。その自信は、いったいどこから来ているだろうと疑問に思ったが、実力からかなと自己解決をした。

一番、零生と笑ってる時間が好きだなと改めて思う。

ずっとこのまま、この時間が続けばいいのに・・・

でも、すぐにその時間は終わってしまう。あっと言う間に家に着いた。

一なんで楽しい時間のほうがすぐに終わってしまうんだろう・・・

充実しているからなのだろうか。

零生は「ただいま」と言って、靴を脱ぎ捨てて家へ入っていく。あたしは、零生の靴を揃えてから家に入った。

リビングに入ると、お母さんが夕飯の準備をしていた。それと、いつも残業だったお父さんも帰ってきていた。

「今日は早いんだね」

と、笑って問い掛けた。お父さんは「ああ」と笑って言ったが、どこかぎこちないことに気づいたが、あたしはあまり気にしなかった。

「ほら、ご飯にするわよ。座って」

お母さんが笑顔であたしに言った。零生はすでに座っていた。あたしはソファの上にランドセルを置いて、食卓に付いた。

夕飯を食べ始めて少したった頃だった。食事の時はめったに口を開かないお父さんが話し始めた。

「今日は、二人に言わないといけないことがあるんだ・・・」

お父さんは重い口調だった。あたしも零生もあまり良い話じゃないと感ずいた。お母さんもご飯を食べる手を止め、暗い顔をする。

「・・・離婚することになったんだ」

あたしたちが5才の時の話だったー

あたしと零生はいつも二人で遊んでいた。その日もいつもの公園に行っていて、初めて家に帰るのが遅くなった日。あたしたちは恐る恐る玄関のドアを開けた。

「ただいまー・・・」

返事は返ってこなかった。そのかわり、大きな物音がした。

あたしと零生は顔を見合わせ、急いで家にあがり、物音がしたリビングへと急いだ。

「仕事を三日も休んで何をしてたの!？」

リビングを覗くとお母さんが尻餅をついて、お父さんに向かって叫んでいた。

「おまえには関係ないだろ!」

お父さんはすごい剣幕だった。その時お父さんはお酒を飲んでて酔っ払ってるみたいだった。元から酒癖が悪く、ストレスが溜まったり、嫌なことがあるとすぐにお酒に頼っていた。

あたしと零生はそこから動く事が出来なかった。ただ見ているだけだった。

否、見ているだけで精一杯だった。

お父さんはお母さんを振り切って、部屋を出て行ってしまった。あたしと零生はお父さんとすれ違った。あたしたちは身震いをした。いつものお父さんとは一変して、目つきが鋭く、目の下には隈ができていてまったくの別人に見えた。

その日からお父さんと会話することが減った。帰りもいつも遅く帰ってくるようになり、話す機会すら無かった。お母さんもいつも笑ってるが、あたしたちの前意外ではどこか疲れてていつも泣いてた。

それから、お母さんとお父さんが度々喧嘩をしたことをあたしたちは知っていたー

一瞬、時間が止まった様な気がした。

あたしも、零生も言葉が出なかった。どう見ても冗談には思えなかった。お父さんの真っ直ぐな目と、お母さんの決意をした目を見ると。

零生は驚きとショックで言葉を失った。

あたしはバンッと机を叩いて立ち上がった。食器がぶつかり、コップが倒れる音が部屋に響く。

「嘘でしょ・・・？」

あたしは呟くような声で言った。

お父さんとお母さんの表情はさっきとは変わっていない。ただ、少し寂しそうな表情に変わったぐらいだ。

あたしは、もう一度声を上げて言った。

「嘘でしょ？だってお父さんとお母さんあんなに仲が良かったのに！」

一本当はわかってる。

「離婚なんて嘘よ！」

—お父さんとお母さんが仲が悪いのを・・・あたしと零生は前から知っている。

「離婚なんて・・・—」

あたしは俯いて何度も繰り返す。

—いつかこんな日が来るんじゃないかと恐れていた。あたしも零生も。だから、二人だけの世界だったら、こんなにも不安にならないんじゃないかと思っていた。ただ、逃げてるだけだとしても・・・。

ぽたぽたと机の上に涙が落ちる。

零生は放心状態だった。前から知っていて、ずっと不安で怖かったことが今、起きたのだから衝撃は大きかった。

「嘘だよね・・・」

一本当はわかってる。こんな現実を信じたくないだけ—・・・。

リビングは静まり返っている。零生も俯いたままで、お父さんもお母さんも何も言おうとしない。

あたしは周りの様子を見て、椅子に崩れ落ちるように座る。

刹那。

お母さんは重い口調で告げる。

「それとね—あなたたち二人も別々に引き取ることになったの」

あたしは目を見開いた。俯いてた零生も顔を上げる。

「—ごめん・・・ねっ・・・」

お母さんは涙を流しながら誤る。

あたしも零生も何も言えなかった。頭では理解をしているはずなのに、現実を受け止めることができなかった—

「零生・・・起きてる？」

「起きてるよ」

二段ベッドの上から零生の優しい声が響く。あたしは仰向けの体制で首まで布団に入り、零生の存在にほっとした。

「・・・どうしたの？」

「ううん。なんでもない」

零生の心配そうな声に涙が出そうになる。唇を強く噛んで堪えた。

あたしは布団を頭までかぶった。

「・・・あたしたち離れ離れになっちゃうんだよね・・・？」

「・・・うん」

「あたし・・・嫌だよ」

「俺もだよ・・・」

零生の声が震えていた。

「・・・あたしね、零生が自慢だったんだよ。今も・・・これからもずっと、零生が・・・」

後半から涙が堪え切れなくて、声が霞む。嗚咽と言葉が重なって上手く喋れない。

「何言ってるか聞こえないよ」

突然横から零生の声が聞こえてきた。

あたしは布団から顔を出し横を向く。零生は二段ベッドから降りてきて、あたしのベッドを覗き込むように微笑んで見ていた。

「久しぶりに一緒に寝ようか？」

暖かい笑顔を向ける。あたしは「うん」と首を縦に振った。

「久しぶりだね」

あたしの横で仰向けに寝ている零生。布団がいつもよりすごく温かい。

「・・・俺もずっと心配だった。お母さんとお父さんが離婚するんじゃないかって。零生も不安だったよな」

零生はあたしの心情を的中させる。いつもそう。あたしたちはお互いの考えてる事や感情にすぐ気づく。まるで心が繋がっているみたい。双子なんだからそういうことは珍しくないのだろうけどね。

あたしは少し気持ちが楽になった。

「零生・・・約束しよう」

零生は真剣な顔であたしを見つめる。そして、ふと口元を緩めて微笑んで言った。

「離れてもあの秘密基地で会おうぜ」

「あーあの、秘密基地。」

「覚えてるよな？小さい時に二人だけでいつも遊んでいた場所」

「覚えてるよ」

あたしは微笑んで答えた。懐かしいあの場所を思いながら。

「やっと笑顔になったな」

零生は嬉しそうな表情で、けど少し恥ずかしそうにはにかんでいる。

いつもあたしのことを思い、考えてくれる優しい零生。幼い時からずっと。いつも零生に助けられてばかりで、負担かけてるんじゃないかって不安になるぐらい。あたしも零生を助けたいと思うのに零生は、何があっても泣かないで弱音も吐かずにいつも前向きで強いから何かしてあげる事なんてなかった。

だけど、あたしには零生の感情や辛い時が伝わってくる。だって、双子だから。

一だから零生、今は一

「一泣いていいんだよ」

あたしは微笑んで零生の顔を真っ直ぐ見た。零生は目を丸くし、そしてその目は少し潤んでいた気がした。けれど、すぐににと骨格を持ち上げた。

「俺は男だから泣かない」

思っていた通りの回答でため息をついた。

「あたしの前ではかっこつけなくていいんだよ。あたしたちは双子で、あたしの弟なんだから」

「けど俺が零衣を守るって決めたんだ。なのに零衣の前で泣くわけないだろ」

「やめてよ！」

あたしは思わず叫んで起き上がった。

「あたしはいつも零生に助けられてるよ！だから・・・あたしも零生の力になりたい、助けたいよ・・・。けど零生はいつも強がって弱音を吐かないから。でも零生の苦しい時は伝わってくるのに何も出来ないのはもう、いや・・・」

目に涙が溜まり零れ落ちそうになる。零生は少し驚いた顔をしてあたしを見ていた。けれど何も言わずにあたしから背を向けた。

やっぱり弱音を聞かせてくれないのかとあきらめかけ、布団に入ろうとした時だった。鼻を吸る音が微かに聞こえてきた。あたしはもう一度口を開いた。

「零生、もう一つ約束しよう」

零生はまったく反応しなかったけど言葉を続けた。

「これからはお互い、辛い時はちゃんと言おうね。あたしだけには話してね」

そう言ってあたしは布団にもぐった。その直後、隣から喉をひくひくと鳴らす音が聞こえてきた。

この時初めて零生は人前で泣き、弱いところを見せてくれた。声に出しては泣かなかったけど、やっとあたしに心を開いてくれたような気がした。

あたしは零生が泣き止むまで眠るのを待った。

「「あっ・・・」」

どてっという音と同時に鳴き声が響く。けれど泣いているのはあたしだけだった。

「あら！大丈夫？二人とも同時に転げるなんて」

お母さんはふふっと笑いながら、びっくりした顔をしてる零生の腕を持ち上げて起き上がらせる。

「ほら零生、あなたは零衣を助けてあげて。男の子なんだから」

零生は一度お母さんのことを見て言われた通りあたしの前まで来て手を差し伸べた。

「大丈夫？」

差し伸べられた零生の手を見てあたしは泣き止んだ。たぶんほっとしたんだろう。

「・・・うん。大丈夫」

あたしはそう言って笑顔をみせた。そして零生の手を取った。

また昔の夢を見た。小学校一年生の頃の夢。この時から零生強い子だった。そして、この日からあたしのことを守るようになった。

あの約束をした夜から何度も朝を迎え、別れの日が来た。

あの日の夕食からあたしたち家族は重い空気が漂っており、お母さんもお父さんも必要最低限な会話しかしていない。けれどあたしと零生には気を使っていた。

あたしと零生はできるだけずっと一緒にいた。あの夜から前よりも一緒に居てすごく落ち着き、二人だと笑う事もあった。

「そろそろ出るぞ、零衣」

腕にしている時計を見ながらお父さんは立ち上がった。無言のままあたしも立ち上がる。零生も無言のままソファに腰をかけており、お母さんはキッチンで作業をしている。リビングには何とも言えない空気が漂っていた。

あたしとお父さんはリビングを出て靴をはいていた。

「零衣、これを持って行き。向こうに着くまで時間かかるんだから途中で食べなさい」

お母さんがキッチンの奥から出て来てあたしにバスケットを手渡した。中はお母さんお手製のサンドウィッチだった。

お父さんの新しい勤め先が隣の県になり、家もそこになった。この町ともお別れ。

「ありがとう」

「元気でね、零衣」

優しい笑顔で送り出してくれてるお母さん。けれど潤んでるお母さんの目を見て、涙を堪えているのがすぐにわかった。

「うん・・・」

「行くぞ」

挨拶もなしにお父さんはあたしの腕を引っ張った。

零生は見送りはしてくれなかった。リビングからも出て来なかった。出る前も一言も喋っていない。なんだか話せる空気じゃなかったからあたしたちは一言も喋れなかった。

一もっと零生と話したかったよ。

玄関のドアが閉まる。それと同時にお母さんの啜り泣く声が聞こえてきた。あたしも堪えてた涙が零れ落ちる。お父さんにはばれないように下を向いて歩く。

零生に次はいつ会えるのだろう。ちゃんと約束の場所に来てくれるのかな。そういう事で頭がいっぱいで不安な気持ちがこみ上げてくる。

そんな時だったー

「零衣！」

あたしは足を止めて振り向いた。まだそんなに離れた距離ではなかったけれど、零生が走って追いかけて来た。

「約束っ！」

そう言って零生は腕を振り下ろした。零生の手握られていた物が零生の手から離れ飛んできた。あたしは反射的につかみ取る。

「これ・・・」

「・・・餞別」

零生は照れくさそうに目を逸らす。受け取った小さな袋の中には空色のビーズのブレスレットが入っていた。突然のプレゼントは凄く綺麗で凄く嬉しかった。零生の彼女になった人はとても幸せだろうなとふと思った。

あたしは涙を拭い、大きく手を振った。

「うん！約束」

また零生に助けられた。さっきより気持ちも楽になり笑顔でお別れが出来たのだから。

十三歳の春、あたしと零生は離れ離れになった。